

たどつのもかし

Vol.6 (H25.6.10)

「江戸時代末期の家老屋敷：林求馬邸」

はやしもとめてい

江戸時代末期の慶応3(1867)年に建てられた、当時の家老林求馬の別邸です。奥白方が周囲の三方を山で囲まれ、もう一方は多度津藩陣屋へと抜ける街道となっているという立地であったため、幕末の動乱期に諸外国の攻撃から、藩主を守るための避難場所として建てられたとされています。現在は町指定の有形文化財になっています。

正面の大玄関は、藩主御成りの際の御用玄関として造られたもので、従者は、小玄関より出入りします。右側六畳は家中の控部屋、左は殿様の部屋奥十四畳、六畳は藩主に対面の場、会議する部屋で広間とよばれました。

各部屋には透彫の欄間が入っており、天井は、格天井(太い木を井桁状に組み、上に板を張った天井)という仏閣の影響と家老格のあらわれたものです。座敷の上段の間の背後には床の間と違い棚を設け、また、調台構えと相対し、広縁に向かって構えています。

門の側には侍の詰所があり、その隣に小玄関(たのもう玄関)、大玄関には式台(玄関の土間と床の段差が大きい場合に設置される板のこと、来客者が地面に降りずに、駕籠に乗れるように設けられた)があり、客間や奥座敷、居間等一つ一つ孤立しないで、互いに連絡されて建てられていることは、寝殿造りとは全く趣を異にして、近世住宅に近いものです。

玄関の屋根は数棟がかま型に接続し、その正面は入母屋作りになって大なる屋根は本総瓦葺きで玄関を構えています。

以上のようにこの林求馬邸は江戸時代末期の武家屋敷の様子を現代に残す、数少ない建造物の一つであるといえます。

